

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

バイオインフォマティクスとシステムズバイオロジーの国際連携教育研究プログラム

ワークショップ参加レポート

Name : 藤田 恵
Title : IBSB 2011 参加レポート
Report: 私は今回Charité - Universitätsmedizin Berlinにて開催された、第11回 International Workshop on Bioinformatics and Systems Biology (IBSB 2011) に参加しポスター発表を行いました。IBSB2011のシンポジウムは7月17日から20日、Summer School, Computational Systems Biology は21日と22日に行われました。
<p>ポスターセッションは2日目の午後に3時間かけて行われました。どのポスターが魅力的だったか投票するという趣向をこらしたシステムにより、自分が見る予定ではなかったポスターにも積極的に見に行き説明を聞きに行ったので、より多くの学生、研究者の方々とディスカッションを行う事ができました。私のポスター発表では、多くの人が研究に興味を示して下さり、自分の研究を充分発表することができましたが、参加者の研究分野が多岐にわたっていることや、私自身の研究データが少ないこともあり、クリティカルなディスカッションには至りませんでした。この悔しさをバネにして、日本に帰ったら研究に励み多くのデータを出して、次回は口頭発表できるようになりたいと痛感しました。口頭発表では、各国各大学の方々のハイレベルな発表を聞き、私も負けなようより一層研究に邁進しようと奮起しました。口頭発表は内容が多岐にわたっていましたが、いくつかの発表は私の研究内容に大変近く、私の一歩先のデータを出されていたので、非常に興味深く、私の今後の研究の参考になることは間違いありません。発表を聞いて本当に良かったと思っています。</p>
<p>シンポジウムの初日はフライトの関係で参加できなかったのですが、シンポジウムの日程中は、参加者が国境や大学の垣根を越えてコミュニケーションを取れるように、Coffee Break や学食での昼食、Boat Trip など多くの国際交流の機会が設けられていました。私は自分の低いスピーキング能力の引け目から、なかなか自分から積極的に話しかける事は出来なかったのですが、同じ京都大学から参加した先輩のフォローにより、なんとかボストン大学の方々とコミュニケーションをとることができました。サマースクールでは講義はもちろんのこと、ドイツの大学院の授業風景に触れることができ、貴重な経験となりました。</p>
<p>今回のドイツでの学会は、1週間という短い時間ながら、非常に意味のある多くの刺激を受けました。自分自身の研究面、英語力の未熟さの確認はもちろんですが、価値観や研究に対する姿勢、プロフェッショナルになるには何が必要でどういう姿勢で何をしなければならないのか。研究者になるにあたり、大変重要な事に今更ながら気づかされました。</p>
<p>最後に、学生という貴重な時期に、この有意義な経験をサポートして下さった研究室の先生方、また京都大学バイオインフォマティクスセンターの諸先生方に心より感謝申し上げます。</p>